

保育を学ぶ学生の身体表現の研究  
—— 顔の表情における一考察・イメージから表情へ ——

渡部 啓治<sup>1)</sup>

A Study of the Physical Expression  
in Training Nursery School Teachers :  
A Consideration about the Expression of the Face  
from the Image to Expression

Keiji Watanabe

Abstract

A questionnaire research about the expressions of 19 faces was carried out for students who train nursery school teachers. As a result, it revealed that the score of “a brave face” and “a terrible face” were especially low. These were pointed out the difficulty of making an intentional expression more than “an emotional face” marked high score. In order to have a confidence making these facial expressions for students, I think it is desirable to introduce the dramatic education programs which enable them to imagine some scenes and experiences using the facial muscles.

In addition to introduce the dramatic education programs in the training school for having a confidence of facial expressions, I propose the importance of experiences both playing loudly from early childhood and getting a technique of an analogical expression.

keywords : Face expression, Drama education

キーワード : 顔の表情, ドラマ教育

はじめに

犬は感情を「尻尾」で表現すると言われている。確かに観察すると、犬の喜怒哀楽は「尻尾」を見ていると良く解る。しかし、犬はどんなに尻尾を振って喜んでもその感情を「顔」で表現する事、すなわち「笑顔」を創ることは出来ないのである。この「笑顔」「笑い」は喜怒哀楽の感情表現の中で

最も複雑なメカニズムだと言われている。香原志勢は「顔と表情の人間学 (平凡社)」の中で「笑いが表情の中で最も進化したものだ」と述べている。

動物の最も原始的な顔の表情は「防衛」と「攻撃」の表情だと言われている。この表情から、動物は進化と共に表情筋が発達し、感情表現の場を顔面に集中していくと言う。さらに人の顔の表情は顔の筋肉によって創られる事は言うまでもな

1) 育英短期大学保育学科

い。これらの筋肉は「表情筋（皮筋）」と呼ばれ、身体の中では、最も多くの筋が存在している身体の部位である。これらの筋の働きによって、人々は様々な感情を顔で表現し、相手との情報伝達（コミュニケーション）の手段の一つとして用いている。また、人の顔の表情は「表情筋」の活動ばかりが左右するものではなく、血液の循環器系が影響する顔色の変化や相手に対しての顔の向き、口の開閉、眼球の動き等、様々要因が組み合わさり顔の表情を創り出している。

これら人間が持つ特有の表情を創り出す機能は、さらに顔面筋の形態をつかさどる頭骨の形態、すなわち人種によって異なると言う。これは大きく三つの人種に区分することが出来る。①コーカイソイド（白人）②モンゴロイド（黄人）③ニグロイド（黒人）である。コーカイソイドは一般的に彫りの深い顔をしており、モンゴロイドは平面的な顔をしている。特に北方（モンゴル国等）のモンゴロイドは彫りの浅い顔だと言われおり、強烈な乾燥や寒さの環境に生き抜いた生物学的な適応の結果だと言う。それに対してコーカイソイドは表情筋がそれぞれに分離独立しており、モンゴロイドに比べると大きな表情を創ることが出来る。また、ニグロイドは口輪筋が発達しており、顔の表情を常に動かしていると言う。ニグロイド特有のリズミカルな音楽に合わせて身体を動かす様は表情も大きく、日本人の日常には見ない文化環境である。このように比較してみると、人種の中ではモンゴロイドの顔の表情が乏しい（表情に変化がない）ことが伺われる。これらの要因は文化的環境など様々なものの影響が考えられるが、とりわけモンゴロイドに属す日本人の顔の表情は変化の少ない表情と言える。いわば、日本人は他人種から比べると顔の表情が活発でないことが結論付けられる。これらの人種的差異は人種の生体や生活文化等に大きく左右されており、一般的には日本人の表情は変わり身が遅いとされている。一方、この様な日本人の文化の中で培われた、無

表情と呼ばれる顔の表情は、独特の表現技法で世界的な評価を得た芸術もある。「能」がそれである。

保育を学ぶ学生にとって、顔の表情は子どもとの関わりの中で大切なコミュニケーションの一つである事は言うまでもない。Albert M. によると、対人の非言語によるコミュニケーションは93%を占め、その内の55%は「顔の表情」38%は「声の調子」が影響すると言われており、言語による意思伝達は7%にしかすぎないとの報告がある。ここからも「顔の表情」は表現の中で重要な技能であることが伺われる。

しかし、若者の「顔の表情の乏しさ（無表情）」を指摘して久しくなるが、残念なことに改善されたという報告は聞いていない。一般的な背景には人とのコミュニケーションの取り方の変貌や希薄さ、生活体験の貧困さ等、彼らを取り巻く生活環境に大きな原因あると考えられる。保育を学ぶ学生にとっても例外ではない。意味無く笑ったり、無表情であったりと言う学生が多い昨今、子どもとの関わりの中で顔の表情が豊たかになることは、保育を学ぶ学生にとって、重要な課題であると考えられる。

この様な事から本研究においては、保育を学ぶ学生を対象に自己の顔の表情に対して、どの様な自己認識を持つか、アンケート調査による自己評価を実施し、身体表現の一つである顔の表情創りの現状とその問題点・課題を探ることを目的とした。

なお、今回の調査においては顔の表情を「内面的な表情」と「外面的な表情」の二つに分けて考えており、「イメージ」を出発とする「顔の表情」を基本的な表情創りのプロセスとして考えている。すなわち、顔の表情のスタートは、その表情を創り出す場面をイメージすることから始まり、それを基に外面的に顔の表情が表出（表現）される事と考えている。したがって、本研究での顔の表情の評価は内面的な顔の表情（イメージ）と外面的な顔の表情（具体的な顔の表現）の二つの方

向からの評価を総合したものである。

## 方 法

### 調査対象

群馬県内 短期大学 保育学科 2 年次学生  
\* 女子のみ

- ・2010年 96名 (8月調査)
- ・2011年 36名 (8月調査)
- ・2012年 53名 (8月調査)

### 調査内容

Ekman, Friesen/Ellsworth (1982) の表情認知の感情カテゴリー 1) 嬉しさ 2) 驚き 3) 恐れ 4) 怒り 5) 悲しみ 6) 嫌悪 の6つの表情を基本に日本の代表的な昔話である「桃太郎」「猿蟹合戦」「花咲爺さん」の場面を追いながら登場人物の顔の表情を取り上げ、代表的な19の場面の顔の表情がイメージ出来、それを演ずる(創る)ことが可能であるかについて、自己評価(5段階)における以下のアンケート調査を実施した。

### 質 問

自分の「顔の表情」について教えてください。

子ども達の前で、童話などのお話をする際に話の中に様々な場面があります。「楽しい場面」とか「怖い場面」等です。ここでは、あなたが登場人物になり、その場面での登場人物の「顔の表情」をつくること(演じること)について教えてください。

顔の表情は実際に「出来る」か「出来ない」かの評価ばかりではなく、その表情がイメージ出来る評価も含みます。イメージが出来て、顔の表情がつかれそうであれば「プラス」の方向に評価をしてください。

19の顔の表情

- ①やさしい時の顔
- ②幸せな時の顔
- ③うれしい時の顔
- ④楽しい時の顔

- ⑤安心の時の顔
- ⑥悲しい時の顔
- ⑦泣く(泣き顔)の顔
- ⑧さみしい時の顔
- ⑨不安な時の顔
- ⑩がっかりした時の顔
- ⑪びっくり時の顔
- ⑫いやな時の顔
- ⑬怒った時の顔
- ⑭恐ろしい(鬼等)時の顔
- ⑮勇ましい(鬼退治に行く桃太郎等)時の顔
- ⑯怖がる時の顔
- ⑰悩む時の顔
- ⑱軽蔑した時の顔
- ⑲真剣な時の顔

これらの表情についてそれぞれ5段階評価(5:出来る 4:少し出来る 3:どちらとも言えない 2:あまり出来ない 1:出来ない)にて、各顔の表情の自己評価をした。

また調査実施前には保育者が子どもに聞かせる簡単な昔話を取り上げ、その話の場面で登場する人物の感情を顔で表現すること(演じること)を実践的に紹介し、具体的な例を示した。

そして最後の質問項目に

⑳あなたは顔の表情が豊かだと思いますか? を設け、同様に5段階による評価を実施した。

更に顔の表情の評価と生活習慣等の関わりを探る為、3段階評価による以下の質問を設けた。

Aあなたは、子どもの頃「外あそび」は好きでしたか?

Bあなたは、子どもの頃「大きな声を出してあそんだ」経験がありますか?

Cあなたは、子どもの頃「身体を動かすあそび」は好きでしたか?

Dあなたは、子どもの頃「ごっこあそび」は好きでしたか? (「ままごと」や「キャラクターのまねごと」など)

Eあなたは、「大きな声を出すこと」が出来ます

か？

Fあなたは、「人前に出ること」は苦手ですか？

## 結果

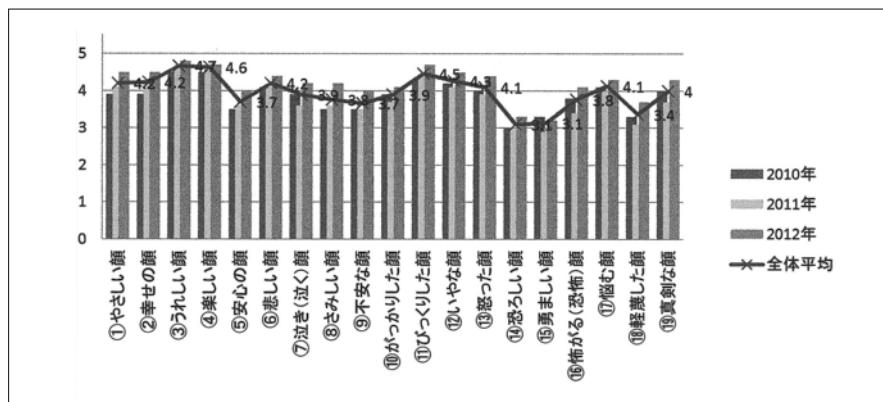
自己評価をした各顔の表情の集計の結果を調査年度別に平均得点と標準偏差値を「自己評価によ

る各顔の表情の平均得点と標準偏差（表－1）」に示した。（図－1）は、これをグラフにて比較したものである。

I）2010年、2011年および2012年のいずれの年の調査においても、各顔の表情得点の数値にはわずかな差は見られたものの、得点の順位においては同様の傾向が見られた。

（表－1） 自己評価による各顔の表情の平均得点と標準偏差

顔の表情	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
①やさしい顔	3.9	0.82	4.1	0.81	4.5	0.6
②幸せの顔	3.9	0.93	4.3	0.75	4.5	0.6
③うれしい顔	4.5	0.75	4.7	0.47	4.8	0.51
④楽しい顔	4.5	0.61	4.7	0.57	4.7	0.61
⑤安心の顔	3.5	0.72	3.6	0.93	4	0.87
⑥悲しい顔	4.1	0.81	4.1	0.75	4.4	0.63
⑦泣き（泣く）顔	3.9	1.07	3.6	1.18	4.2	1.02
⑧さみしい顔	3.5	0.97	3.6	0.76	4.2	0.76
⑨不安な顔	3.5	0.96	3.5	0.91	4.2	0.93
⑩がっかりした顔	3.9	1	3.7	1.19	4.1	0.93
⑪びっくりした顔	4.3	0.93	4.4	0.8	4.7	0.53
⑫いやな顔	4.2	0.92	4.1	0.95	4.5	0.66
⑬怒った顔	4	1.03	3.9	1.09	4.4	0.92
⑭恐ろしい顔	3	1.05	3	1.06	3.3	1.08
⑮勇ましい顔	3.3	0.97	2.9	0.67	3.2	1.01
⑯怖がる（恐怖）顔	3.8	0.89	3.4	0.96	4.1	0.98
⑰悩む顔	4.1	0.88	4	0.84	4.3	0.79
⑱軽蔑した顔	3.3	1.12	3.1	1.17	3.7	1.06
⑲真剣な顔	4	0.92	3.7	1	4.3	0.88
⑳表情が豊かである	3.5	0.95	3.5	0.87	4	0.78



（図－1） 各顔の表情の平均

II) いずれの年においても上位を示す高い得点が見られた顔の表情に「③うれしい時の顔(全体平均4.7)」「④楽しい時の顔(全体平均4.6)」「⑩びっくりした時の顔(4.5)」があり、イメージしやすい、創りやすい顔の表情であった。反対に下位の低い得点が見られた顔の表情が「⑮勇ましい時の顔(全体平均3.1)」と「⑭恐ろしい時の顔(全体平均3.1)」があり、イメージしにくく、創りにくい顔の表情であった。

III) (表-2)は「あなたは、自己の顔の表情は豊かだと思いますか?」の質問に対する自己評価

の結果である。この結果「1 豊かでない」「2 あまり豊かでない」とネガティブな方向に自己評価した学生が2010年18%(17人)、2011年14%(5人)、2012年14%(8人)であり、平均すると約15%の学生が顔の表情が豊かでないと答えている。

IV)「顔の表情と生活習慣等に関わる質問(子どもの頃のアソび等)」のアンケートの結果は(表-3)にまとめた。

(表-2) 顔の表情の豊かさ・自己評価

	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
豊かではない	4	4%	0	0%	4	7%
あまり豊かではない	13	14%	5	14%	4	7%
どちらとも言えない	21	22%	13	36%	5	9%
やや豊かである	51	54%	13	36%	33	58%
豊かである	6	6%	5	14%	11	19%
合計	95	100%	36	100%	57	100%

(表-3) 生活習慣等との関わりの質問

A あなたは、子どもの頃 外あそびは好きでしたか?

	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
きれい	2	2%	3	8%	0	0%
どちらともいえない	11	12%	5	14%	9	17%
すき	82	86%	28	78%	44	83%
合計	95	100%	36	100%	53	100%

B あなたは、子どもの頃 大きな声であそんだ経験がありますか?

	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
ない	11	12%	2	6%	4	9%
どちらともいえない	9	9%	12	33%	14	33%
ある	75	79%	22	61%	25	58%
合計	95	100%	36	100%	43	100%

C あなたは、子どもの頃 身体を動かすあそびは好きですか?

	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
きれい	6	6%	2	6%	4	8%
どちらともいえない	14	15%	8	22%	9	17%
すき	75	79%	26	72%	40	75%
合計	95	100%	36	100%	53	100%

D あなたは、子どもの頃 ごっこあそびは好きでしたか？						
	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
きらい	0	0%	0	0%	1	2%
どちらともいえない	10	11%	4	11%	1	2%
すき	85	89%	32	89%	51	96%
合計	95	100%	36	100%	53	100%

E あなたは、大きな声を出すことができますか？						
	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
できない	16	17%	11	31%	9	17%
どちらともいえない	20	21%	10	28%	18	34%
できる	59	62%	15	42%	26	49%
合計	95	100%	36	100%	53	100%

F あなたは、人前に出ることが苦手ですか？						
	2010年 (n=95)		2011年 (n=36)		2012年 (n=53)	
苦手	39	41%	22	61%	22	42%
どちらともいえない	39	41%	9	25%	15	28%
苦手ではない	17	18%	5	14%	16	30%
合計	95	100%	36	100%	53	100%

## 考 察

### 1 「出来ない顔の表情」と「出来る顔の表情」

(表-1) から、各顔の表情の平均得点が低い「出来ない顔」の順に並べ替えてみた(表-4)。結果、各年度において「⑮勇ましい顔」と「⑭の恐ろしい顔」が低得点を示し、反対に高得点の顔の表情は「④楽しい顔」と「③うれしい顔」が見られた。

これらの高得点の顔の表情(出来る顔)は、学生達の日常の生活の中で幾度となく繰り返されてきた顔の表情であろう。言い換えると過去に経験された表情で、イメージしやすい顔の表情であり、繰り返し表現された、情緒的な快の顔の表現である。この類の顔の表情は人として一番身近な表情でもあり、コミュニケーションをとる為には最も重要な顔の裁きである。一分野からの考察ではあるが、人が社会の中で生きていく為には、必要な顔の表現・裁きである事が高い得点をもたらした結果であると考えられる。

一方、低得点(出来ない顔)である「勇ましい顔」や「恐ろしい顔」は映像やイラスト等では見てイメージ出来るものの、実際には真似てあそぶ機会の少なく、平和な日本の現代社会においては、無縁の顔の表情なのかもしれない。実際、テレビ映像等から流れてくるこの類の表情は、生の人間の顔の表情で演じることは少なく、仮面をかぶるものが多いように感じられる。この様な顔の表情を創る為には感情表現の幾つかの要素がからむ為、イメージがしにくい顔の表情と考えられる。更に表情運動にも微妙なコントロールが必要な為と考えられ、表情筋の緊張が必要となってくる。どちらかといえば意識的、意図的な表情と言えるのではなかろうか。香原は「顔と人間の表情学(平凡社)」の「顔の表情の左右対称性」の中で「情緒的な表情は左右対称となり、意志的・意図的な表情は左右非対称になる」と述べている。乳幼児期には左右対称だった顔の表情が大人になると意識的なものも含まれるようになり、対称が崩れて複雑になってくると言う。すなわち顔の表情を創る

(表-4) 得点の低い顔の表情順位

順位	2010年	2011年	2012年
1	⑭恐ろしい顔	⑮勇ましい顔	⑮勇ましい顔
2	⑮勇ましい顔	⑭恐ろしい顔	⑭恐ろしい顔
3	⑱軽蔑した顔	⑱軽蔑した顔	⑱軽蔑した顔
4	⑤安心の顔	⑯怖がる(恐怖)顔	⑨不安な顔
5	⑧さみしい顔	⑨不安な顔	⑤安心の顔
6	⑨不安な顔	⑤安心の顔	⑯怖がる(恐怖)顔
7	⑯怖がる(恐怖)顔	⑧さみしい顔	⑩がっかりした顔
8	①やさしい顔	⑦泣き(泣く)顔	⑧さみしい顔
9	②幸せの顔	⑩がっかりした顔	⑦泣き(泣く)顔
10	⑦泣き(泣く)顔	⑲真剣な顔	⑲真剣な顔
11	⑩がっかりした顔	⑬怒った顔	⑰悩む顔
12	⑬怒った顔	⑰悩む顔	⑬怒った顔
13	⑲真剣な顔	①やさしい顔	⑥悲しい顔
14	⑥悲しい顔	⑥悲しい顔	①やさしい顔
15	⑰悩む顔	⑫いやな顔	⑫いやな顔
16	⑫いやな顔	②幸せの顔	②幸せの顔
17	⑪びっくりした顔	⑪びっくりした顔	⑪びっくりした顔
18	③うれしい顔	③うれしい顔	④楽しい顔
19	④楽しい顔	④楽しい顔	③うれしい顔

事から言えば、低得点を持つ顔の表情は意志的、意図的な複雑な要素を持つ顔の表情であり、創るのには、難しい顔の表情と言えるのではなかろうか。

一方、現代人の顔の特徴として顎が狭まり、顔が細くなる傾向にあると言われている。これは咀嚼の低下などにより、相貌が変化したと言われるが、この様な変化からも「厳しい」緊張を必要とする顔のイメージや表情は難しいのかもしれない。

また、「恐ろしい顔」は実際に真似るとなると多くの表情筋を大きく動かす必要があり、複雑な筋運動の要素を必要とする顔の表情と言える。イメージも含めて難しい顔の表情の一つと考えられる。

## 2 顔の表情と生活等との関わり

保育を学ぶ学生にとって顔の表情が豊かに表現

出来ることは、大切な保育技能のひとつであることは言うまでもない。自己評価ながら「顔の表情が豊かである・やや豊かである」と答えたのは全体の約60%の学生であった(表-2)。保育を学んで1年5か月の時点での調査ではあるが、気がかりな数字である。特に注目したいのは「顔の表情が豊かでない・あまり豊かでない」と答えた学生が保育の養成校で15%見られた事である。15%が多いか少ないかは、比較対象が無いので結論を出すことが難しいが「自己の表現に自信を持つこと」は、表現において重要な基本的要素であり、何らかの施策を考えるべきである。これは養成校に学ぶ期間内だけで解決出来ることではないが、対処する養成プログラムのあり方を再検討し、このような自己評価をする学生を0%にする指導が必要である。

次に顔の表情に自信がもてない学生達が、どのような生活習慣や自己の行動(表現)を認識して

(表-5) 顔の表情の総合低得点順位と生活等との関わり

順位	総合得点	㊹表情の豊かさ(自己評価)	A子どもの頃外あそびは好きか	B子どもの頃大きい声であそぶ	C子どもの頃身体を動かすあそび	D子どもの頃ごっこあそび好きか	E大きな声を出すことが出来るか	F人前に出ることが苦手か
1	48	2	2	1	2	3	1	1
2	50	1	2	1	2	2	1	1
3	53	2	2	3	3	3	1	1
4	55	1	3	2	3	3	1	1
5	56	2	3	2	3	3	1	1
6	56	2	2	2	1	3	3	1
7	57	3	3	2	3	3	2	2
8	58	3	3	3	3	3	1	1
9	58	4	3	3	3	3	1	1
10	59	3	3	3	3	3	1	1

いるのか、幾つかの質問の結果と照合し、傾向を探ってみた。

(表-5)は各顔の表情の総合得点(19の顔の表情得点)が下位の低得点の学生10人を選び、前述した質問:A, B, C, D, Eとの関わりを見てみた(サンプル数が少ないため、統計的な処理は用いず傾向を考察ことにした)。

この低得点者と有意な傾向にあると思われる質問が「大きな声が出せるか」を内容とする(質問:B, E)項目である。すなわち低得点者に「出来ない(得点1)」を選択した学生が多く見られたことに注目したい。

大きな声を出せる事の要因一つとして、声を出す体験があげられる。これは子どもの頃の声を出すことを伴う、数多くのあそびの体験から得られる(身に付く)ものと考えるのが自然である。声を出すこと(大きな声で言葉を発する)で表情筋が刺激され、表情も豊かになると思われる。良く言われる「暗い人」は無表情で、言葉も少なく、話をしても小さな声の人が多いとの話に通ずるものがあるように思われる。

また「子どもの頃の外あそびの好き嫌い」(質問:A)、「子どもの頃の体を動かすあそびの好き嫌い」(質問:C)にも若干その傾向が伺われる。

なお、質問Fの「人前に出ることが苦手であるか」については、多くの学生が「苦手・どちらとも言えない」と答えており、顔の表情との有意的な傾向は見られなかった。質問:Dの「子どもの頃のごっこあそびの好き嫌い」についても多くの学生が「好き」と答えており同様な結果である。

### 3 保育者養成における豊かな顔の表情の育成

人間は相手の顔から、人の心やその社会の文化を読み取ることが出来ると言われている。保育を学ぶ学達にとって、子どもに対し保育者からのコミュニケーションの出発に「顔の表情」があることは言うまでもない。保育者は子どもの前で絵本を読んだり、劇あそびやごっこあそびしたり、多くの場面でドラマの世界が展開される。子ども達は保育者の顔の表情や言葉、動き等でイメージの世界へ導かれるが、そこで展開される保育者の表現の豊かさのあり方で、子どもの情操への刺激が変化すると考えられる。

「恐ろしい顔」「勇ましい顔」は苦手とする表情だが、この顔が登場する童話が多い。更に年長になると怖い話にしばし好奇心を持つ事もある。このような場面において保育者は子ども達とイメージを共有し、ドラマの空間を演出して、その世界



へ導く活動は、子ども達の情操教育の観点からも大切な技能である。

### I 幼少時のあそびを考える

現在、保育を学ぶ学生が育った環境を振り返ると「都市化現象」「核家族化」の影響であそび場不足やあそび仲間の減少等が話題となるものが多い。とくに子どものあそび仲間の減少は、世界中に見られる傾向である。このような事が社会問題視される以前は、若者の「顔の無表情」などはあまり話題にされなかった。

顔の表情を創り出す為にはその場面のイメージが必要であり、それは過去のあそびの経験の構築が一つの要因と考えられる。過去においてどのようなあそびを体験したかが問われるのだが、たとえば幼少時に「大きな声」で「躍動的な身振り」で活発にあそんだと言うことは、表情筋を刺激し、情的な顔の表情を表出する活動となる。当然、あそんだ場面のイメージも強烈に残り、生涯記憶に留まるはずである。今回調査した学生が幼少時にどのようなあそびの空間や仲間を持ったかは不明であるが、子どもの頃、大きな声を出してあそんだ経験がある学生や現在大きな声が出る学生ほど顔の表情が豊かな傾向にあると考える。

「子どものあそび場の空間の整備」や「身体を動かしてあそぶ楽しさの経験」を再度見直す必要があると考える。

### II アナログ的な表現の体験

ほとんどの学生達は、携帯電話やスマートフォンにてメールのやり取りをしている。そのやり取り中の文章表現に顔文字がある。複数の文字や記号を用いて感情の顔を作るのだが、驚くほど多種多様な組み合わせの工夫がされて感情を表現している。少し前の時代ならば、紙に鉛筆で文章と絵が書かれている手紙が渡されているのであろう。確かにこの様なメールは手間を考えると便利で効率の良いデジタルの伝達手段である。しかし人間は本来、目に見える、手で触れるものから感じる取るアナログな生物であることを見直す必要があ

ると考える。特に表現においては、アナログの原始的な体験を十分に積むことで人間の基本となる喜怒哀楽の豊かな表現が期待出来る。見方を変えるとデジタルは人の思考過程や感情をとび越えて行くものと思われる。音楽のパーカッションを例に挙げると、いまやコンピュータからは様々な音を指一本で引き出すこと出来る。元々、音やリズムは人間の生活空間から生まれてきたもので、自然物体から出発したものである。確かにデジタルは一寸の狂いもなく再生することが可能だが、アナログは自分の感性を頼りとするところが大きくあり、思いの音を創るためには、様々な試行錯誤を繰り返さなくてはならない時間のかかるものである。この様な事は身体表現や顔の表情を育成する為のプログラムにおいても同様の考え方が数多く含まれている。

デジタルは便利で生活に必要なものではあるが、アナログの存在を体験的に理解する事の大切さを伝えたい。

### III ドラマ教育・演劇教育の必要性

顔の表情を創り出す基本は、イメージの内面化と表情筋を代表とする表情運動と考える。豊かな顔の表情は、豊かなイメージの内面化からスタートするものであり、それらは物や事象などに対しての興味や発見の行動にさかのぼる。様々な体験を重ねるごとにイメージは更に広く豊かなものに変容していく。

保育者は子どもとイメージの世界(物語の世界)であそぶ為には、現実だけの生活体験では限界がある。例えば嬉しい時のキリンの気持ちや表情、怒った時のひまわりの花の気持ちやしぐさを理解することは難しい事である。しかし、現実には不可能な場面のイメージ等は「ドラマ教育」や「演劇教育」を活用する事によって、様々な場面の体験が出来、想像の世界に自己を置く事やその場面で自己を見つめて行動する事が可能である。これまで不可能だった自己との出会いが期待され、さらに顔の表情を豊かに演ずる事の楽しさも体験出

来るはずである。

しかし、主に養成校における身体表現の内容は「舞踊」に集中しており、ドラマ教育や演劇教育のプログラムを実施している養成校は数少ない。「演劇教育」においてはシアター的なプログラムが多くを占めているのが現状である。

保育を学ぶ学生にとって、子どもたちの世界を理解することは大切なことである。ドラマを通じて、子どもの世界を行き来する事は、新たな子ども理解へのアプローチとなる事であろう。このような体験の積み重ねから、豊かな表現の技能を身に付ける事を期待したい。

## まとめ

保育の様々な場面で顔の表情を捌けることは、保育者にとって、大切な課題の一つである。今回の調査は保育を学ぶ学生達の顔の表情創りの自己認識の結果を基に表現力の育成のあり方について考察を試みた。ここでは顔の表情創りを「内面的な表情」と「外面的な表情」とに分けて考え、顔の表情の出発はその場面をイメージすることから

始まると考え、19の顔の表情を対象にアンケート調査を実施した。その結果「勇ましい顔」「恐ろしい顔」に低得点が見られた。これらは高得点が見られた情緒的な顔の表情に対して、意志的・意図的な顔の表情創りの難しさの違いが指摘された。

このような顔の表情創りに自信を得る為には、表情筋を用いる体験や様々な場面のイメージが可能なドラマ教育のプログラムの導入が望まれる。

さらに顔の表情の表現に自信を持つ為には、幼少時からの「大きな声を出してあそぶ遊びの体験」の大切さや「アナログ的な表現技法の多様な体験」さらに養成校における「ドラマ教育・演劇教育のプログラムの導入」を提唱する。

顔の表情を始めとする学生たちの幅広い豊かな表現力の育成を目指したい。

## 参考・引用文献

- 香原志勢 2000年 「顔と表情の人間学」平凡社
- 佐藤綾子 2003年 「非言語的パフォーマンス 人間関係と表情しぐさ」東信堂
- チャールズ・ベル 2001年 「表情を解剖する」医学書院
- 平山 論 1994年 「発達心理学の基礎Ⅱ」ミネルファ書房

〔 2012年12月3日 受付 〕  
〔 2013年1月10日 受理 〕